



なごや「聖歌」だより 8月号'09

教会とは何かー基礎成聖式に思う

6月30日に新聖堂の「基礎成聖式」の祈りを行いました。聖歌や祝文のなかで「教会」とは何か、何のために教会を建てるのかははっきりと教えられていました。

基礎成聖式は大きく分けて三つの儀式でできています。宝座の位置に十字架を立てる儀式、礎石を据える儀式、聖堂の四辺を聖水で浄める儀式です。

中心になるのが礎石を据える儀式です。用意した石板に聖水と聖油をそそぎ、至聖所の一番奥、主教の座の高座の位置に石を据え付けます。

元になっているのは福音書の葡萄園と農夫のたとえ話です。「家造りの捨てた石が隅の親石となった(聖詠117:22、23 マトフェイ21:42)」、つまりユダヤ人が捨て、十字架刑に処したハリストスご自身が隅の親石(日本風に言えば大黒柱でしょうか)で、それを揺るがない基盤として教会を建てる事が宣言されています。

祈られたる隅石、爾が教会の動かざる礎、爾の尊血をもって己れの教会を建て、死をもって、これを築き、復活をもってこれを完成す、昇天をもって、これを降福し、爾が聖神の恩寵を遣わして、爾の至聖なる名の光栄と爾の聖なる復活を尊び、これを記憶するが為に建立する処のこの堂の造成者や…(祝文)

ハリストスご自身がご自分の復活を記憶する無血祭(聖体礼儀)を行うためにこの聖堂を建てられること、それが使徒から主教へ連続と受け渡されてきた正しい唯一の伝統であること、教会は聖神の働きによって生きていることがはっきりと表されています。

至上者、この聖堂を基礎せらる、神はその中にあり、世に動かざらん、(石を据えるときの祝文)

続いて聖歌は、

イアコフ夙に興き、枕せし石を執り、立てて柱となし、油をその上に注ぎて日へり、これ神の殿なり、此天の門なりと、旧約聖書創世記の35章を引き、この場所こそ天の門で、ここにおいて天と地が結ばれることを歌います。



聖歌練習

「新聖堂成聖式」

の練習開始。

♪名古屋:代式後基礎練習。

8月9日(日)

気が早いようですが、来年早々の成聖式に向けて、「晩禱」、「成聖式」、「主教聖体礼儀」の練習を始めてゆきます。名古屋教会では、聖歌は選任の聖歌隊ではありません。みな色々な役目を兼務しているので、秋になると他の準備や、バザー降誕祭などの行事も多いので、かなり忙しくなるでしょう。そのためにも早めに準備を進めたいと思います。代式の日にはまとまった練習ができます。9日は午後、執事会建設委員会もありますので、是非合わせてご参加ください。

成聖式にはたくさんの来賓や来会者が予想されます。名古屋教会らしく、みなが参加できる一体感のある礼拝を目指したいと思います。そのためには、みなさんひとりひとりがしっかり力をつけて、自信を持って歌うとが大切です。新しい曲目も入ります。がんばりましょう。



♪半田: 8月5日(水) 11:45ごろから

ズナメニイ研究会 2 第4回

8月19日水曜日11時半ごろから

変容祭聖体礼儀後

ズナメニイの記号を学習するうちに、たとえば右の三つのクレスキー記号、五線譜に移し替えれば、みな二分音符ですが、テキストのアクセントの位置、言葉の重要性、メロディの動きなどによって微妙に使い分けられていることが見えてきました。次回からは1調を取り上げて、メロディの特徴を探ってゆきます。少人数で気づいたことを話しあいながら勧められています。どなたでも、いつからでも参加できます。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Znameny/>



8月の指揮当番

2日	エレナ広石	16日	ピーメン松島
23日	マリア松島	30日	ピーメン松島

礼拝と聖歌の関係

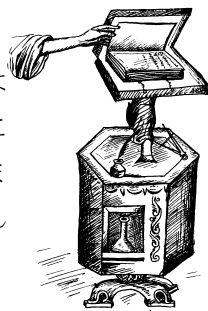
祈祷の式順やそこで行われる儀礼と動作によって聖歌の内容や長さが決定されます。たとえば聖体礼儀では司祷者が至聖所内で「黙唱祝文」を小声で唱える（あるいは黙読する）とき、聖所では聖歌が歌われています。司祭が大きな声で唱える「高声」（けだし……）によって区切られ、司祭の祈りと聖歌が統合されて礼拝全体が形作られます。

教会のまわりを行進する時に歌う歌、司祭や輔祭が聖堂内を炉儀する間に歌われるもの、祈祷のある部分が聖堂の中央や啓蒙所で行う時に歌う歌もあります（例：リティヤ）。聖歌は奉神礼の動作に合わせて歌われます。また、動作と動作の合間を埋める聖歌はその動作や祝文の長さに合わせます。正教会では儀式の隙間を器楽で補填することがないので、儀式や動作が音楽構成に影響を与えます。

内容面で、教育的特徴が大きいののは晩課と早課です。晩課と早課の聖歌は祭日や調（エコス・グラス）によって変化する日替わりの材料が豊富で、主に聖詠で構成される固定枠に組み込まれます。週の曜日によって、また1年の（聖神降臨祭後）第何週か、何調に当たるかによって、（教会の暦の中で）何月何日かによって、テキストの内容も音楽も異なる素材が提供されます。この日替わりの素材は、その日の奉神礼的テーマの核心を示し、聞く人の心を正しい方向に導きます。

対照的に聖体礼儀では、前半部分の「啓蒙礼儀」を除いて、教育的要素はほとんど含まれません。主要部分である後半の「信者の礼儀」には日替わり要素はほとんどなく、全体を通して「献げる」歌が歌われます。

日替わりの音楽要素が最も多彩なのは晩課と早課で、さまざまな歌が、調によってさまざまなタイプの旋律で、さまざまな歌い方のスタイルをとって歌われます。



3. 歌い方のスタイル

礼拝の構造とテキストの奉神礼的機能によって、どう歌うかが決定されます。原則的に歌い方のスタイルは全正教会共通で、また幾つかは西方教会にも共通で、起源の古さが推測されます。歌い方のスタイルから生じる音楽形式が礼拝の音楽の構造を決定します。ティピコン(奉事規則書)によって、どこでどのように歌うかが指定されています。それは時代や地域によって多少違いがありますが原則的にはかわりません。

実施方法は、二つのスタイルに大分することができます。ソロとして歌う場合、もうひとつは複数人数の聖歌隊が歌う場合です。

ソロとは、司祭、輔祭、誦経者、聖歌者(カンター)が一人で唱える（歌う）場合で、聖詠唱、エクフォネシス（連祷、聖書の読み）などが含まれます。これらは複数で行えません。本来聖歌隊が歌うべきところを、やむをえず一人で歌う場合はここには含まれません。

一人で行うものはさらに三つに分類できます。

- ① 短い祈りあるいは祈願の高声、通常は1つあるいはごく少数の短いフレーズかセンテンス。連祷の祈願、連祷の終わりの司祭による高声など。
- ② 聖詠唱とエクフォネシスの境界線上の歌うように唱える誦読。
- ③ 聖書の読みなどの厳粛な読み。（西方教会ではlectio solemnitasと呼ばれる）

*日本では、誦経はたいていの場合、まっすぐに棒読みにしますが、外国では、使徒経や福音経の読みには、ある種のメロディに載せて歌われます。ポロキメンなども、まっすぐではなく、調のメロディで歌われ、晩課の「主や我等を守り」なども簡単なメロディで歌われることもあります。①の輔祭祈願や司祭の高声は日本でもメロディがついています。

Johan von Gardner, *Russian Church Singing*, SVS

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が開けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料